

日露戦争と軍人の風流

——『風俗画報』『征露図会』特集号における「韜略の余事」をめぐる——

梅田 径

一 はじめに

明治から大正期にかけて出版された国内最初のグラフ雑誌、東陽堂の『風俗画報』は明治三二年（一八八九）から大正五年（一九一六）にかけて五一八冊が刊行された。夏目漱石が『道草』において「不幸にして彼の知識は、『常山紀談』を普通の講談ものとして考える程度であった。それでも彼は昔し出た『風俗画報』を一冊残らず綴じて持っていた。」と記したように大正期ごろにはあまり読まれなくなっていたようだが、国内外の風俗や地理・刊行案内といった多彩な特集で広く人気を博していた。¹博文館の総合雑誌『太陽』（明治三八年（一八九五）一月、昭和三年（一九二八）二月）と並んで同時代における文化・社会・風俗を知る上で欠かせない資料となっている。

『風俗画報』は、日清戦争から日露戦争にかけて「日清戦争図会（征清図会）」、「征露図会」の特集を組み、華麗な石版刷りの画報によって、戦地の状況を銃後の人々に想像させる大きな役割を果たした。同時に、鶯亭金升による特集「日ボン地」で大当たりをとり、雅俗硬軟取り混ぜる明治後期における戦争表象を代表するメディアとなったといつて差し支えないだろう。当然、その内容はほぼ全編にわたって体制翼賛的なものであり、戦争の実態についての機密や新規の情報があるわけではない。歴史的観点から、ことさらに取り上げて論じるべき部分はないように見える。しかし、その特集の内容を子細に見比べてみると、日清戦争と日露戦争とは、戦争表象という点からその特集のあり方に小さくない相違を見いだすことができるだろう。

日清、日露戦争における大衆メディアの研究は枚挙に暇がな

②。新しいメディアとなった漫画（ボンチ絵）の研究や、日本におけるプロバガンダの研究など、『風俗画報』を史料として使う論考も目立つ④。また、川崎市市民ミュージアムの展覧会「日清・日露戦争とメディア」展覧会図録⑤には、日清戦争と日露戦争における漫画、写真などのメディアが多数掲出されており、戦地の状況がリニアに伝わる情報戦の時代を迎えていたことを実感できよう。文学研究においても、『明星』における与謝野晶子詠の評価や、戦後における日露戦争のイメージを決定づけた司馬遼太郎『坂の上の雲』を批判するものなど、日露戦争のメディア表象をめぐって現代の受容に至るまで様々な研究が積み重ねられている。

そうしたメディア論的視座からはしばしば日清・日露戦争を連続するものと考え、通信技術や報道制度の深化によってその表現が変化したとみなす視点が多くみられるのに対して、日清戦争と日露戦争間の、同一メディアにおける文化表象の相違を直接論じたものは、多くはないようだ。

本稿では、『風俗画報』の日清戦争および日露戦争の特集号の変化と、日露戦争における軍事と文化の表象を「戦略の余事」のコーナーから考えてみたい。

二 『風俗画報』における日清・日露戦争間の特集号

明治二七年（一八九四）七月に勃発した日清戦争から、明治三八年九月に終結する日露戦争の終わりまでのおよそ一〇年間、

『風俗画報』では、日清戦争の特集である「日清戦争図会（征清図会）」（七八号・明治二七年九月二五日刊）から、日露戦争の特集である「征露図会」第一編（二八四号・明治三七年二月二五日）の刊行までに、二〇六号が刊行され、特集号表にまとめた特集が組まれている。

日清・日露戦争の戦間期における特集は、各地の「名所図会」の系譜に関わるもの、国内の時事に関わるもの、地域の歴史・風俗・祭祀に関わるもの、そして外地の戦乱に関わるもの到大別できる。戦乱に関する特集については、「征露図会」以前には、「日清戦争図会」一編、「台湾征討図会」一編、「台湾征討図会」二編、「支那戦争図会」三編という帝国日本の外地戦争（植民地征服戦争）に関わる特集が組まれていた。

『風俗画報』では、これ以前にも「日本帝国陸軍特別大演習記事及服制図会」（五四号・明治二六年六月一日）で日本の軍事的側面に関心を寄せていた。明治一五年一月四日付「勅諭」からはじまり、洋式の陸軍服制、陸軍将校服制が、近代化された軍備とあわせて彩色で掲出され、明治二五年一〇月二三～五日に行われた陸軍特別大演習の参観記が絵入で記される。「征清図会」以降に見られる翼賛的興奮は見られないものの、近代化された軍隊の「実力」に対する異常なまでの信頼と軍備への過信が読み取れる。末尾には演習地の情報（演習地に属する町村概略）と参加した将校の名前が列挙される（南北軍指揮官参謀長并隊長人名）。豊富な情報と細部まで細やかに描かれる図、そして様々

特集号表

特集号名	特集号巻次数	刊行期間	号数
日清戦争図絵 (征清図絵)	1～4、 5～10	明治二七年九月二五日 ～明治二九年七月二五日	78、80、81、82、84、86、 87、89、92、96
京都大博覧会	1	明治二八年六月一八日	
台湾征討図絵	1	明治二八年八月三〇日	98、101、103、105、109
日本婚礼式	中、下	明治二九年一月二五日 ～明治二九年五月一日	117、113
台湾土匪掃攘 図会	1～2	明治二九年五月一日 ～明治二九年五月二五日	114、115
沖繩風俗図会	1	明治二九年六月二八日	117
海嘯被害録	上、中、下	明治二九年七月一〇日 ～明治二九年八月一〇日	118、119、120
新撰東京名所 図	1～41	明治二九年九月二五日 ～明治三七年一月二五日	123、131、133、139、141、 143、145、149、151、153、 155、161、162、167、173、 175、177、189、191、193、 195、203、205、207、209、 220、222、226、228、231、 236、241、244、246、248、 259、263、271、277、280、 282、
洪水地震被害 録（大洪水被 害録）	上、中	明治二九年一〇月一〇日 ～明治二九年七月二五日	124、126、128
台湾蕃俗図会	1、2	明治二九年一月一日 ～明治二九年一月一〇日	129、130
御大喪図会	上、下	明治三〇年二月二五日 ～明治三〇年三月一〇日	135、136
鎌倉江の島名 所図会		明治三〇年八月二五日	147
新撰東京歳時 記	上、下	明治三一年一月二五日 ～明治三一年二月二五日	157、159
奠都三十年祭 図会		明治三一年四月二五日	163
豊公三百年祭 図会		明治三一年五月一五日	164
香取名所図会		明治三一年七月二五日	169
江島鵠沼逗子 金沢名所図会		明治三一年八月二〇日	171

江戸の花	上・中・下	明治三十一年一月二五日 ～明治三十二年二月二〇日	179、181、183
雪況図会		明治三十二年三月一日	184
火災消防図会		明治三十二年四月五日	186
諸国災害図会		明治三十二年九月二八日	197
各地災害図会		明治三十二年十一月一日	199
慶事集		明治三十二年十二月一日	200
皇太子殿下御 慶事千代乃祝		明治三十三年六月一五日	211
支那戦争図会	1～3	明治三十三年八月一日 ～明治三十三年一〇月五日	213、215、217
民間行事新年 の祝		明治三十四年一月二〇日	224
足尾銅山図会		明治三十四年七月一〇日	234
来客案内郵船 図会		明治三十四年一〇月二五日	239
菅原大神千年 大祭図会		明治三十五年五月一〇日	250
日蓮聖人開宗 第六百五十年 紀念大会図会		明治三十五年六月五日	251
伊豆七島図会		明治三十五年八月五日	254
横浜名所図会		明治三十五年一〇月五日	257
西本願寺葬式 図会		明治三十六年四月一日	266
第五回内国勸 業博覧会図会	上、下	明治三十六年六月一〇日 ～明治三十六年九月三〇日	269、275
甲府名勝図会		明治三十六年八月一〇日	272
成田鉄道名勝 誌		明治三十六年九月一〇日	274

な戦地上のデータが掲出されており、「征清図会」以降の戦争図会の様式的規範として注意すべきであろう。

『風俗画報』全体としてみれば、戦争を取り扱う特集号は比較的少ない部類に入る。戦争という題材がら、継続して出し続けることが難しかったのもあるのだろうが、実際には、「征清図会」の当たりをひいた経緯によって、戦争表象そのものを特集することを望んでいた形跡が窺える。「台湾征討図会第一編」(九八号・明治二八年八月三十日)、山下重民「緒言」には、台湾における反乱の鎮圧を「征清の余業」ではあるが「我版図である以上は。その名を正さるべからず」として、「征清図会」の事実上の続篇であることを解説している。義和団事件のほか、北京籠城戦などを扱った「支那戦争図会」(二二三号・明治三三年八月一日)もこのような意識のもとで組まれた特集であろう。同時代における帝国日本の対外戦争を網羅的に扱う雑誌となつていた点に留意したい。

そして、明治三七年二月二五日、「征露図会」第一編が出版される。冒頭に山下重民「管城の雄鎮○大局の全勝を期すべし」の論説が述べる通り、仁川沖海戦(明治三七年二月九日)のほぼ直後に出版されており、ロシア軍艦ワリヤークとコレエツの撃沈を記している。以降、「征露図会」全二七編に渡って、日露戦争の終わりと講話までの様相を、時系列にそつて紹介しながら進んでいく。

先にも触れたが、『風俗画報』は、日露戦争中に「征露図会」

とは別に「日ボン地」という別の特集を展開していった。「ボンチ」の名前の通り、鶯亭金升編、春郊雅による露軍に対する「おどけ」を前面に押し出した特集で、端唄、替歌、義太夫、落語、小話と当時の大衆文化を窺う上でも興味深い。明治三七年九月一日に第一編が出て以来、同年十二月二五日までの七編が刊行されている。ただし、「日ボン地」と「征露図会」には相互に紙面上の交流や参照はない。

三 「韜略の余事」の立項

両特集とも、日本側に都合良くではあるものの、戦争の状況をかかなり詳細に、かつリニアに取り入れている。日露戦争自身写真の普及や海底ケーブルの普及などで欧州や北米にも詳細に伝えられていたことは広く知られている。東陽堂でも記者が徴兵されて戦地の状況をつまびらかに報告していた。この速報性は、日露戦争に日清戦争とは異なるメディア状況を生み出させていた。それは、当然戦争そのものや軍人たちの表象をも変化させていた。その一例として、「征清図会」と「征露図会」の初篇の記事細目を比べてみたい。

「日清戦争図会」第二回

論説 日清戦争

記事 詔勅／交戦申告使／日清戦争の端緒／明治維新以後
本年に到る日清韓関係の小歴史／金玉均の横死、東学党の蜂起／我軍の渡韓、日清韓の交渉談判／大鳥公使と大院君

／朝鮮国王新政の論書／閔族の黜罰／東学党鎮定後の朝鮮
／豊島の海戦記事 成歆牙山大勝利／凱旋／歓迎宴会
雑録 日清戦争図会題言／日清戦争図会に題す／愛国心／
朝鮮の風土

「征露図会」第二編

管城の雄鎮 大局の全勝を期すべし
世界の交義 開戦の由来／交渉顛末／交渉断絶の通牒
旭旗への大光 陸軍への勅語／地方官への訓示／帝国在留
露国臣民に対する処置／露国の宣戦／宣戦と教育／公使領
事の引揚／露国公使京城撤退に関する公報・中立を宣言し
たる列国・清国中立に関する公文／宣戦奉告祭
銃砲の快音 大本営設置／旅順方面の海戦／水雷駆逐隊の
殊勲／名譽の戦死者／仁川の海戦／露国海軍の失える戦闘
力／優詔を海軍司令官並司令長官に賜る／海軍大臣艦隊を
擣う／列国の激賞／露寇我が商船を襲う／日進春日の二大
艦／日進、春日横須賀に安着す／回航員歓迎会
臣民の忠誠 対露同志会の宣言／国民後援協議会／軍人の
餞別（特志の婦人）
戦時の法令 防御海面令／戒厳令／鉄道軍事供用令／鉄道
軍事輸送規程／軍事郵便規則／戦時海運事務取扱規定中改
正／海軍予備備服延期／少軍医候補生の実務練習／海軍
戦時職工規定／外国電報暗号禁止／恤兵金品取扱規程／海
軍恤兵金取扱規程／軍資献金の収納／国庫債券の発行／戦

時禁制品

兵家の錦囊 露国陸軍の編成／滿州の露国兵／露国の東洋
艦隊／本年度の露国予算

輜略の余事 征露軍歌／征露の歌

日清戦争時には「論説」「記事」「雑録」程度であった大細目
が「管城の雄鎮」「世界の交義」「旭旗への大光」「銃砲の快音」
「臣民の忠誠」「戦時の法令」「兵家の錦囊」「輜略の余事」と装
飾された表現になり、更に小細目を立てられる構造になってい
る。日清戦争時との違いは瞭然たるものがある。

後には「将士の逸談」などの大細目が増えるほか、「征露雑項」
という（その他）に該当する項目も立てられる。もともと『風
俗画報』は「門」を立てて、各記事を分類する形式を取ってい
た。「日清戦争図会」の時期にも、後に「漫録」などの項目が
たてるが、日露戦争時点に見える細やかな大項目を立てること
ができていない。「征露図会」における細目の立項は、メデイ
ア側がこの一〇年間で（戦争についての見方）を持つようになって
いったことの表れとも言える。外交、国への忠義、交戦状況、
法令、装備などを細かく分析する視点を持つようになり、それ
ぞれの側面から（戦争）を分析するようになったのである。

注意すべきは、「輜略の余事」という項目が立てられたこと
にある。第一編巻頭には、「世界に名高き日本国 其有様は皆
知らん」から始まる、福島安正の作として広く知られた軍歌が
載る。「征露軍歌」として挙げられるものは、「此は鎮西散人横

井忠直氏が抜刀隊節にて自作せるものなり」として、同じく軍歌三番を掲出している。横井忠直については後に触れるが、福島作の軍歌が掲出されるように、軍人の〈文化的側面〉を取り上げることはこれまでの『風俗画報』にはなかった。「韜略の余事」項は、戦争と文化（当然プロバガンダを含む）との関わりが日露戦争を画期として変化したことを示唆している。

四 「韜略の余事」の内実と思想

「韜略の余事」は、三二五号までに、機械的に各細目を抽出すると七〇件ほどが確認できる。それを一覽したのが【付録】の表である。「征露図会」全巻に必ず存する項目というわけではなく、戦地の実況を伝える「銃砲の快音」や、兵装や兵士の近況を伝える「兵家の錦囊」に比べれば扱いは小さい。途中からは「軍人狂歌」という主に公募狂歌・短歌の「詞林」欄を担当していた文廼屋秀茂が選者となって狂歌の公募も行われるようになる。

内容を種別ごとに見てみると、多いのは短歌（二一回）軍歌（九回）、替唄（六回）などが多い。他に漢詩、謡曲、長唄なども見られ、漢文体の駢儷文、演説の紹介もある。新体詩として紹介される作品も大半は軍歌に属する作品であることも注意しておきたい。

作品はバラエティに富むとは言いがたく、紙面中の扱いが小さいこともあって精選された内容のものを掲載している印象が

ある。「韜略の余事」の大半は、巻頭の「征露軍歌」が示すように、軍人たちによる出征先での創作である（傍線は稿者が付した。以下同）。

「出征将校の詩歌」（二八五号・明治三十七年三月二五日）

二月十七日御用船仁川に入らむとして乗組の将校等遠からず船員に別れむとするに当たり、錦水將軍先づ筆を執りて「三十七稔二月十七日出征途次第十二師団長陸軍中将井上光」と自署して、是れは名刺代りに差出すなり、余は未だ詩歌を得るに遑あらず、と呵々大笑す、佐々木旅団長次で筆を把り、

古への宇治のいくさにいや勝る勲を立てむありなれの川

初瀬川花も紅葉も散りはて、かくはしき名は世に流れけむ

とぞ書き附ける、中館師団軍医部長も取敢へず、十年前まぐさかひたる鴨緑の流れをみたす時は来にけり

参謀福原少佐傍に在り、笑つて一詩を賦す。

誰渡大江撃楫歌、満天風雪斫龍鼈、寶刀三尺雄図足、樽俎十年遺恨多、雲霧鷄林古城闕、春寒禹城旧山河、邊功固屬男兒事、不見漢家老伏波、（後略）

「手塚中尉の近什」（二九九号・明治三十七年一〇月一五日）

左に掲ぐるは、此程某方面の総攻撃に参加して名譽の負傷

となし現に予備病院に在りて療養中なる予備陸軍中尉手塚魁三氏の吟詠なり。中尉は栃木県宇都宮の人にして出征前までは同地の中学校に教鞭を執り、傍ら俳句絵画に心を潜め頗る其妙を得たり資性洒落にして能く人を容る、陣中暇あれば即ち筆を執りて得意の俳句を草す、其近什を誦するに、中尉の襟懷綽々として常に余裕あるを想見すべし。(歌略)

このような戦地での創作は、書翰・書信を通じてすばやく現地にまで届けられていた。それは「戦況」とは違う、兵士の内面や心理状態を知るよすがとして掲出されている。こうした個々人の「風流」は、外征中の日本軍全体の心性であると拡大解釈されていく。

「大將月下の詠」(三〇二号・明治三十七年一月二〇日)

兄玉大將が此頃在京の友人に送りたる書翰の中に

二十三夜月も冴えければ 見る人の心もひとつ月一つ
十月二十三夜は旧曆の九月十三日に相当し、昔見し彼の謙信が霜軍營に満ちての二十八字を賦せし夜とかや、今や大將十七文字を以て戦士数十万、唯一心の美性を歌ふ、此美性あればこそ我軍は忠勇なれ、壮烈無双なれ、大將の句は真卒にして而も古今の絶唱とするに足るべし。

兄玉源太郎の歌は佳什とは言いがたいが、こうした詩歌を賦すことが「美性」であり、「美性」を持つがゆえに、「我軍は忠勇なれ、壮烈無双なれ」という評価へと繋がっていくのだとい

う。上杉謙信「九月十三夜陣中作」⁽⁵⁾を参照している点も軍人と武人(武士)の連続性を見ようとする視座として注意を要するだろう。

「將軍の閑日月」(三〇五号・明治三十七年二月一五日)

北越の健児軍の將として至る所武勲を灼かし当代の鬼將軍として三尺の童子も尚其高風を慕ふ岡崎少將が頃日人に寄せられたる信書の一節に

中屋大人の朝顔の花のかずく玉章に封じこめ歌
さへ添て侍りたりけるうれしき

朝夕にひらくもたのしたまつさの中にこめたる朝顔の花
雨に日に心をかけし朝かほの花はさすがに見ことなり

けり

黒鳩公の遼陽官舎に朝貌見ことに咲けるを聞て

手に植し人はいつこか白露のおき別れたるあさかほの花
遼陽の陥落のをり

あつさ弓ハルピンの野にまどゐして君が代うたふ時ち
かつきぬ

と英雄の胸中別に閑日月あり想ふ当年機山公の英風!

戦地にあつても「閑日月」を失わない將校の「英風」がこの短歌から読み取られている。「岡崎少將」は、第一五旅団長の岡崎生三で、歌語の使い方も不自然ではないが「英風」を感じ

させるほどの佳作ではない。漢詩・短歌・新体詩（軍歌）といった詩歌は、こうした軍人の「風流」を日本軍全体の「美性」へと変換する装置として機能する。同時に、俗謡もまた日本軍の心理に資するものとして表象される。

例えば「征露サノサ節（某将校の作）」（二九六号・明治三十七年九月一五日）の詞書には、

軍中の風流は夫の八代大佐の尺八曲を初めとして其他陣營にありて能く韻事を弄ぶもの亦少なからず所謂英雄胸中自ら閑日月あるものか今や遼東の野にありて三軍を叱咤しつゝ、ある某将校は此ほど俗謡数曲を自作しその知人に寄せ来れり、俗曲のよく人心を動かすことは今更いはず、情趣深きものあれば次に録すること、なしぬ。

とあって、以下「不思議やな、脚はしびれて「ダルニー」市」から始まる八番の俗曲がある。末尾には「（於満洲某地豚小屋、有情有涙の一征露土作）」の署名がある。俗謡もまた「人心を動かす」ものとして、戦地における軍人の「情趣」を担うものとされていたのである。

『伊豆中佐の風流』（三〇〇号・明治三十七年一月三日）

（前略）我軍隊の近況は事秘密に属すれば茲に明々地に云へないが茲二週間も顔を洗ふ事も出来ない繁劇これで事情は推せられたしソコデ図らず浮かんだ『色がある承知でほれた横恋慕』の替唄一つ御目にかけやう、句調の咄は覚悟の前なれど意気だけは酌んでもらひたく曰く

「堅い事承知でかゝる旅順口打出すからにや何処までも攻て落さにやおかぬぞへ」

このように、戦地における「詩歌」と「俗謡」は共に戦争遂行の「覚悟」や「意気」、「情趣」と共に日本軍の優れた特質を規定するものとして解釈されるのである。こうした意識がロシアへの蔑視と快勝を続ける日本への讚美に結びついていたことは言うまでもない。

同時に、戦地の苛烈な様子を示す詠も掲出される。「陣中華すさび」（三一七号・明治三十八年五月二六日）には軍人二人の実体験の歌が載せられる。

三月五日益山台の戦闘に於て敵の砲弾白石騎兵中佐の右脇に中れるも微傷なければ

君はそも戦の神に坐すらむ中れる弾丸に傷を負はねば翌六日同地の戦闘中又も敵弾来りて白石騎兵中佐の持てる軍刀の鞘を貫き外套をも射通したれど身に微傷だも受けざりしかば

武夫の心をこめし太刀風に飛来弾丸も避けてゆくらし他二首が「満洲左翼軍一等獣医上野庄五郎氏」の作として掲出され、それに次いで中原特務曹長の歌一〇首がある。

韓地行軍途上

打ちすてしふるき軒端も俛ばれぬ敵に逢はざる旅のつれ

（中略）

古のその古の古の民をぞ偲ぶ日々の室居に

異国の枯野の末に宿るみの明日といはんけふ一日だけ
残すべきこゝろもあらず大君にみをも命も捧げ尽して

このような威風と愛国を前面に押し出す詠風は日清戦争期にも先蹤がないではないが、『風俗画報』のような一般的なグラフ雑誌で取り上げるようになったことの意味は小さくない。以前に取り上げた古典和歌風の歌語はなりを潜め、戦地の興奮と願望がない交ぜになった即事の歌となっている。

一方で銃後の作も多く掲出されている。観世清廉による新謡曲『出陣』(二八七号・明治三十七年四月二五日)や、片山九郎三郎兄弟作『新謡曲旭桜』(二九六号・明治三十七年九月一五日)などの新作謡曲が紹介されていたり、第一高等学校学生作の「征露の歌(調アムール河)」を初めとする学校からの詠があったりする。また、米国紐育音楽会社「可愛き日本」は「在シヤトル愛国婦人会の久水唱歌子」から送られたものとされる。さらに、広瀬中佐の妻に送られた歌もある。様々な階層の人々が、それぞれの形で軍事に奉仕する形での文化活動を行っていたように見せる目的がここからもうかがえるだろう。

「韜略の余事」の最後は次の二小細目で終わる。

〔黒田子爵の近什〕(三一九号・明治三十八年六月二五日)

枢密顧問官黒田清綱子の近什左の如し

敵艦撃沈の際浪烈しかりしを聞て

四方の海に響き渡りぬるさの船くたきし風はかみかせ

にして

〔長谷場純孝氏近什〕(三一九号・明治三十八年六月二五日)

長谷場純孝氏は過般韓国漫遊中日本海々戦の捷報を聞き欣然左の一首を賦して東郷大将に贈りたりと

朝鮮平壤旅行中日本海々戦大勝利の詳報に接し歎
天喜地の余り東郷大将におくるとてよめる歌
海原に醜の敵艦打沈め国の礎彌やかためけり

日本海海戦における捷報にまつわる政治家の歌で締められる。ここには軍人たちの「風流」はもはやなくなり、歌語もレトリックもない勝利の興奮の余韻だけが五七五七七のシラブルで記されているにすぎない。それはいままで「韜略の余事」が示してきた軍人たちの内面が、戦争の終わりと共に不要になったことを示しているようでもある。

五 「韜略の余事」以降

「征露図会」は二六編まで続くのだが、「征露図会」二四編で「韜略の余事」はなくなる。日本海海戦を最後に日露戦争における大規模な戦闘はなくなってしまうので、散発的な記事はあるものの、日露戦争以降はまた「名所図会」に代表される風俗グラフ誌に回帰していくのである。紙面を賑わした軍人の詠もまた姿を消していくのだった。

つまり、軍人の詠による「情趣」や「風情」は戦争中にのみ意味をもつ特質なのである。平時になれば、そうした情趣が国

民の普遍的な性質として敷衍されることはなくなっていく。同時代には「征露」と付く本が多数編まれ、「輜略の余事」に重複する吟詠がある、国木田独歩も携わった『征露軍人吟詠集』が大当たりをとった。¹⁸このような日露戦争の時のメディア状況が、後の日中戦争、アジア・太平洋戦争における翼賛的報道へと、さらにいえば「日本軍の規律」神話へと続いていくのである。¹⁹その意味で、『風俗画報』の日露戦争の特集の仕方は注意を向ける価値あるものと思われる。

六 余事の着想

こうした「輜略の余事」の特集意図は何から発想されたのだろうか。時代の空気といえればそれまでであるかもしれないが、一つは軍事侵攻の成功を歌で言祝ぐ事例として、「平壤大勝利の歌」（八〇号・明治二十七年一〇月二八日）がある。ほぼ唯一、『風俗画報』で「日清戦争」に関わる文化事業を記したこの軍歌の作者は、陸軍編修官横井忠直（横井古城）であった。

横井忠直は、広瀬青柳門下の学者で、明治一三年（一八八〇）に陸軍御用係となり、同一七年に陸軍大学校教授、二三年に陸軍編集となった人物である。日露戦争では満洲軍総司令部付となった。『征西戦記』『日本戦史』などの著者があるが、軍歌の作詞歌としても著名である。²⁰

横井は「鎮西散人 横井忠直」として、『風俗画報』百号刊行の祝辞（明治二十八年一〇月一〇日）を出していた。同じく祝辞を

出したのは黒川真頼であった。著名な学者の二名からの祝辞を掲載したものとみてよい。

思えば「輜略の余事」冒頭にあたる、「征露軍歌」（二八四号・明治三七年二月二五日）も「此は鎮西散人横井忠直宇治が抜刀隊節にて自作せるものなり」として記されていて、日露戦争の軍歌が、『抜刀隊』（外山正一作詞、シャルル・ルルー作曲）を模して作られたという注意書きは、それだけ陸軍関係者が軍歌を戦意高揚の礎になるものと理解していたということであり、軍隊のメディア表象の重要度が上がっていたことを示している。

七 おわりに

「輜略の余事」における多種の文芸の採用は、短歌や漢詩といったいわばエリート文藝が、日本人の風流を担うのと同じぐらいに、端唄・長唄、替歌、軍歌といった俗な、あるいは新興の文藝形態もまた人心を感応させるものだとする思想を體現したものと考えられる。これらの感応によって軍人は情趣を解するすぐれた心性を持つことになり、それは「日本」という地域に特有の美点であるとされるのである。

それまでは所属階級によつて分断されていたであろう様々な文藝風俗が同じ特集の元で同列にならび、銃後と前線の作品が交互に取り扱われる「輜略の余事」は、日本において身分や立場の高低によらず、様々な立場の人々が（戦争）²¹の元で一体化する理想を體現せんとするものといえる。「西將軍の近詠」

(二九〇号・明治三七年六月二五日)が短歌をここでだけ「国詩」と記した意識もこれに連なるものだろう。

このような戦争の中での文化の取り扱い方を、漫画や映画も使い植民地を巻き込んだ、アジア・太平洋戦争中の大翼賛体制を支えるメディア状況の前身として見るのも不当ではないだろう。この日露戦争において軍人の「短歌」が大きく取り上げられることの意味は、決して小さいものではないのである。²²⁾

【凡例】

『風俗画報』は『K Books版『風俗画報』復刻版(ゆまに書房、二〇二〇)に拠ったが、表紙の一部がトリミングされるなどの問題もあるため、必要に応じて早稲田大学図書館蔵本を利用した。引用に際して字体を通行字体に改め、字詰めを変更した。『風俗画報』は逐次刊行物としての性質上、目次、内題、細目などにずれが生じることがあるが、煩瑣になるため原則として『K Booksの整理に従い、はつきりと誤りであると認められる場合には訂正している。本研究は、JSPS課題番号22K13040、同課題番号21J00181の成果の一部である。

注

(1) 永井荷風や寺田寅彦といった明治期の知識人たちも『風俗画報』を引いて考証を行っていた。柳田國男も『野鳥雜記』(『アルト』四〇五、紀伊国屋書店、一九二八・八・一〇)で言及して

おり、昭和初期には貴重な資料としてされるようになっていたようである。

(2) 奥武則「露探 日露戦争期のメディアと国民意識」(中央公論新社、二〇〇七)、安田浩、趙景達編『戦争の時代と社会 日露戦争と現代』(青木書店、二〇〇五・九)、平間洋一編著『日露戦争を世界はどう報じたか』芙蓉書房出版、二〇一〇)、木下和寛『メディアは戦争にどうかかわってきたか 日露戦争から対テロ戦争まで』(朝日新聞社、二〇〇五)、貴志俊彦『帝国日本のプロパガンダ——「戦争熱」を煽った宣伝と報道』(中央公論新社、二〇二二)など。

(3) 福井純子「おなべをもってどこいくの——日清戦争期の漫画が描いた清国人」(『立命館大学人文科学研究所紀要』八二二、二〇〇三・二二)、芳賀徹、清水勲編『日露戦争期の漫画』(筑摩書房、一九八五)。

(4) 森登「江戸・明治の視覚 銅版・石版万華鏡」日本古書通信社、二〇一七)、「民衆が見た植民地征服戦争・台湾——『風俗画報』と『点石齋画報』を中心に」(『史苑』六三二二、立教大学史学会、二〇〇三・三)など。

(5) 展覧会図録「日清・日露戦争とメディア」(川崎市市民ミュージアム、二〇一四)参照。

(6) 赤塚行雄『与謝野晶子研究 明治の青春』(学芸書林、一九九〇)参照。

(7) 渡辺延志『日清・日露戦史の真実——『坂の上の雲』と日本

人の歴史観」(筑摩書房、二〇二二) 参照。

(8) 同じ「緒言」には、「幸いに世上の高評を博し、発行の毎回、書肆の丁男先を争ふて群来るせられしは、深く本堂の光榮とする所なり」とある。「征清国会」の当たりによる経済的成功が、戦争を特集する動機となっていたと推測される。

(9) 山田朗「世界史の中の日露戦争」(吉川弘文館、二〇〇九)。

(10) 「記事 故陸軍歩兵大尉安藤辰五郎君」(二二七号・明治三三年一〇月五日) 参照。

(11) 『讀賣新聞』明治三十七年二月七日付に他出。また原山煙「福島安正の言説——シベリア単騎横断旅行以後の大衆向け活動について——」(『桃山学院大学総合研究所紀要』三一—八、二〇〇六・三) 参照。

(12) 「征露国会」中、「鉄砲の快音」は五七三回。「兵家の錦囊」は一四二回、「戦時の法令」は六八回、「臣民の忠誠」は一四回、「征露雑項」は一四六回におよぶ。

(13) 但し、新体詩も含めるとこの数は一四になる。

(14) 山田注(9) 前掲書。

(15) 頼山陽『日本外史』(巻一一、武田氏上杉氏) に所見。『北越軍談』他にも他出を確認できる。元の詩は月光を見て故郷を顧みる七言絶句であるが、ここでは遠征に来て月をみるという点だけが評価されている。

(16) 佐佐木信綱編『征清歌集』(博文館、一八九四) など、日清戦争期の戦意高揚を詠じた詞華集や軍歌集が多数出版された。

(17) こうした軍人たちの優れた人間として表象することは、逆に軍人たちがもつ矮小な、あるいは人間的な側面をなかつたことにしている。木下直之「日露戦争を語るもの」(成田龍一、小森陽一編『日露戦争スタディーズ』紀伊國屋書店、二〇〇四・二) では、日露戦争中にボルノ写真が出回っており、「弾除け」「お守り」などとして流通していたことに注意を促しており、新聞や雑誌などのメディアだけではない「もの」に注目することの必要と、戦地における人間らしさの位相を簡単に定位することに注意を促している。

(18) 国木田独步、枝元長汀編『征露軍人吟詠集』(近事画報社、一九〇五)。今回触れることが出来なかったが『風俗画報』では扇子に彩色で取り上げられた「各宮妃殿下の御歌」も掲出されており、日露戦争の総括歌集のようになっている。日露戦争期における詩歌は、軍隊と銃後だけではなく、宮廷とも紐帯を取り結ぶものだった。宮廷の女性たちが戦時においてどのような位相にあったのか考える上でも「輜略の余事」は重要である。

(19) この点では、司馬遼太郎『坂の上の雲』(産経新聞夕刊、一九六八・四・二二—一九七二・八・四) の影響は無視できない。渡辺延志「日清・日露戦史の真実——『坂の上の雲』と日本人の歴史観」(前掲) では、『坂の上の雲』が日本における日露戦争観に大きな影響を与えたこと、その後の新出史料によって司馬遼太郎の記述は信用がおけないことを論じている。

(20) 『大分県人士録』(大分県人士録発行所、一九一四) に横井の

詳しい伝記が載る。

(21) こうした、戦争のもとで一体となる国民像は日清戦争の頃から理想化されていた。佐谷真木人『日清戦争「国民」の誕生』（講談社現代新書、講談社、二〇〇九）参照。

(22) 当然、こうした帝国主義へと突き進む社会状況と詩歌についての研究も少なくない。和歌文学会編『帝国の和歌』（岩波書店、二〇〇〇）では多くの論文で、新体詩と戦争協力についての展開を論じている。

（うめだ・けい／日本学術振興会特別研究員PD、日本体育大学非常勤講師・青山学院大学非常勤講師、早稲田大学総合研究機構日本古典籍研究所招聘研究員）

【付録】「豁略の余事」掲載細目一覧

号	刊行年月日	細目	小見出し	作者	属性	形式	数量
二八四	明治37年2月25日	ナシ		福島少将	軍人	軍歌	1
二八四	明治37年2月25日	征露軍歌		横井忠直	軍人	軍歌	3
二八四	明治37年2月25日	征露の歌(調アムール河)		第一高等学校学生	学生	合奏	20
二八五	明治37年3月25日			錦水将軍(井上光)	軍人	署名	0
二八五	明治37年3月25日	出征将校の詩歌		佐々木旅团长	軍人	短歌	2
二八五	明治37年3月25日			中館師団軍医部長	軍人	短歌	1
二八五	明治37年3月25日			参謀福島少佐	軍人	七言絶句	1
二八五	明治37年3月25日			歩兵中尉土方清	軍人	短歌	1
二八五	明治37年3月25日	閉塞隊の勇将広瀬少佐の風流		広瀬少佐	軍人	軍歌	1
二八五	明治37年3月25日	征露歌		京都府師範学校作曲	学校	歌	20
二八五	明治37年3月25日			露國進軍歌、露 国退軍歌	不明	軍歌	5
二八五	明治37年3月25日			和歌の浦(替唄)	不明	替歌	1
二八五	明治37年3月25日	余興		油磊石	不明	替歌	1
二八五	明治37年3月25日			雨の夜(替唄)	不明	替唄	1
二八五	明治37年3月25日			旅順港海軍記 (砲攻の段)	不明	軍歌	1
二八五	明治37年3月25日	職業婦辞		屈兵 痴囊子	不明	駢體文	1
二八七	明治37年4月25日	定州騎兵隊衝突の歌		近衛師団補充馬廠第五班	軍団	合唱	6
二八七	明治37年4月25日	旅順閉塞決死隊		島居沈作歌、今井虔松	音楽家	合唱	1
二八七	明治37年4月25日	中村少将の歌		陸軍少将中村覚	軍人	国風	2
二八七	明治37年4月25日	討露の歌		東京高等商業学校	学校	歌	5

二八七	明治37年4月25日	謡曲『出陣』		御世清康	能樂者	謡曲	1
二八七	明治37年4月25日	篠塚上等兵小兎を抱て演説す		工兵上等兵篠塚新七郎	軍人	逸話	1
二八八	明治37年5月10日	海戦軍歌(広瀬中佐を悼む)		陸軍編修横井忠直作	軍人	軍歌	1
二八八	明治37年5月10日	駆逐艦隊三月十日の砲戦		海軍中主計 江口壯二郎作	軍人	軍歌	1
二八八	明治37年5月10日	広瀬中佐追悼の歌		海軍少将山内万寿治	軍人	短歌	2
二八八	明治37年5月10日			山内万寿治夫人	軍人の妻	短歌	1
二八八	明治37年5月10日			山内万寿治夫人	軍人の妻	俳句	1
二八八	明治37年5月15日	松井如蓮氏の新作		駆逐艦隊司令官長井群吉、 速鳥艇長 竹内次郎、朝霧 艇長 石井寿次郎、松居加 連、杵屋六三郎節附	軍人	長唄	1
二八九	明治37年5月30日	匠薙大尉の新作軍歌		海軍大尉匠薙胤次	軍人	軍歌	2
二八九	明治37年5月30日	旅順港封鎖に於ける決死隊附 海軍中佐広瀬武夫の戦死		原大蔵	不明	軍歌	7
二九〇	明治37年6月15日	西將軍の近詠		長谷場致堂	政治家	国詩(短歌)	1
二九〇	明治37年6月15日			西將軍	軍人	国詩(短歌)	1
二九〇	明治37年6月15日	可愛き日本		米国維音音楽会社	会社	歌	3
二九二	明治37年7月25日	鷗外漁史陣中の歌		賀古軍医部長	軍人	短歌	1
二九二	明治37年7月25日			森鷗外	軍人	短歌	1
二九二	明治37年7月25日			小金井喜美子	軍人の妹	短歌	1
二九二	明治37年7月25日			賀古軍医部長	軍人	短歌	1
二九二	明治37年7月25日			森鷗外	軍人	新体詩	1
二九三	明治37年8月10日	南山攻撃の新体詩		中村少将	軍人	新体詩	9

二九四	明治37年8月25日	軍事狂歌	文廼屋秀茂大人撰	狂歌人	狂歌	25
二九六	明治37年9月15日	新謡曲旭桜（半能）	中清廉、唯子大野徳孝、片山九郎三郎兄弟作	能楽師	謡曲	1
二九六	明治37年9月15日	征露さのさ節（某将校の作）	某将校	軍人	さのさ節	8
二九六	明治37年9月15日	軍事狂歌	文廼屋秀茂大人撰	狂歌師	狂歌	25
二九八	明治37年10月2日	軍事狂歌	文廼屋秀茂大人撰	狂歌師	狂歌	38
二九九	明治37年10月15日	手塚中尉の近什	予備陸軍中尉手塚魁三	軍人	俳句、端唄	13
二九九	明治37年10月15日	白石少尉の遺詠	遼東戦死将校白石元次郎	軍人	短歌	1
二九九	明治37年10月15日	倉地少尉の風流	歩兵少尉倉知文平氏	軍人	短歌	1
二九九	明治37年10月15日	軍事狂歌	文廼屋秀茂大人撰	狂歌師	狂歌	22
三〇〇	明治37年11月3日	伊豆中佐の風流	伊豆中佐	軍人	替歌	2
三〇〇	明治37年11月3日	遼陽附近の岡崎山	岡崎少将	軍人	短歌	4
三〇二	明治37年11月20日	大将月下の詠	兄玉大将	軍人	連句	1
三〇二	明治37年11月20日	軍事狂歌	文廼屋秀茂大人撰	狂歌師	狂歌	23
三〇五	明治37年12月15日	將軍の閑日月	岡崎少将	軍人	短歌	4
三〇五	明治37年12月15日	軍事狂歌	文廼屋秀茂大人撰	狂歌師	狂歌	27
三〇八	明治38年1月15日	中村少尉の雅懷	中村陸軍少将	軍人	短歌	12
三〇八	明治38年1月15日	（図）各宮妃殿下の御歌	各宮妃殿下の御歌	皇族	短歌	12
三〇八	明治38年1月15日	軍事狂歌	文廼屋秀茂大人撰	狂歌師	狂歌	25
三〇九	明治38年2月1日	新曲大和魂	澤花月園、小森花嶋作、柘屋勝四郎曲	長唄	長唄	3
三〇九	明治38年2月1日	軍事狂歌	文廼屋秀茂大人撰	狂歌師	狂歌	19
三一	明治38年2月25日	陣中の詠	白石砲兵曹長（幹彦）	軍人	短歌	5

三一	明治38年2月25日	〈函〉各宮妃殿下の御歌		各宮妃殿下の御歌	皇族	短歌	13
三一	明治38年2月25日	風流大尉の替唄		手塚渡村	軍人	替歌 (端唄)	3
三一	明治38年2月25日	軍事狂歌		文廻屋秀茂大人撰	狂歌師	狂歌	39
三一	明治38年3月25日	鮫島將軍の近詠		鮫島將軍	軍人	短歌	2
三一	明治38年3月25日	白樺中村將軍の雅懷		雄将中村覚	軍人	短歌	4
三一	明治38年3月25日	故陸軍中尉佐藤岩之助君のサノサ節		故陸軍中尉佐藤岩之助	軍人	サノサ節	1
三一	明治38年3月25日	かたみの鷹の羽		直連蓬園作歌、荻岡松柯作曲	音楽家	軍歌	1
三一	明治38年3月25日	軍事狂歌		文の屋秀茂撰	狂歌師	狂歌	39
三一	明治38年4月25日	万歳をどり		不明	不明	踊り	1
三一	明治38年4月25日	軍事狂歌		文の屋秀茂撰	狂歌師	狂歌	19
三一	明治38年5月25日	伊豆中佐の近信		伊豆連隊長	軍人	七言絶句、短歌	2
三一	明治38年5月25日	陣中筆すさび		満州左翼軍一等獣医上野庄五郎、中原特務曹長	軍人	短歌	16
三一	明治38年5月25日	軍事狂歌		文の屋秀茂撰	狂歌師	狂歌	39
三一	明治38年6月25日	黒田子爵近仕		枢密顧問官黒田清綱子爵	政治家	短歌	1
三一	明治38年6月25日	長谷場純孝氏の近仕		長谷場純孝	政治家	短歌	1
三一	明治38年6月25日	軍事狂歌		文の屋秀茂撰	狂歌師	狂歌	35

*号は『風俗画報』の通巻数。Jk Booksの整理に従った。細目がない場合には「ナシ」と記した。作者には本文中の作者表記を記し、属性には職業階層を示した。作者、属性が分からない場合には不明と記した。形式には文藝のジャンルを示した。属性と形式は篇者が判断して付している。数量には掲出された歌の番、句、首、聯数の合計を記した。俳句と短歌が入り交じることもあるので、細目中的ものを合計して記した。